

## 研究概要

檜田美雄（徳島大学総合科学部）

奥田さやか、ほか徳島大学総合科学部国際社会文化研究コース所属の9名は、1997年4月から1998年10月に掛けての間、総合テーマ『ラジオスタジオの相互行為分析』の下で、4つの班に別れて研究を行った。

研究は、地域のABC放送（情報源秘匿のため仮名）とFMやまのは（仮名）のラジオ放送をしている現場に繰り返し取材に向き準備をしたのち、そこで総計6時間にわたるビデオカメラ撮影を行い、さらにその動画の分析を行いつつ論文執筆をする、という形でなされた（国際社会文化研究コースの『社会調査実習（檜田の開講科目）』の枠を利用）。また、放送局の各種スタッフ（アナウンサー、ディレクター、コメンテーター等）に対するインタビュー調査、関西の放送関係者養成の専門学校への取材も補行的に行った。以下、主な知見を各班の論文ごとにあげて研究概要とする〔「インタビュー」（荒木・藤井・李）と「専門学校取材」（檜田・森川）については、内容紹介を第3部の当該の章に譲る〕。

### （1）空間班（奥田・杉野・高木）「ラジオスタジオ空間におけるカテゴリー化」

ラジオ番組は、リスナーにむけて放送されている。この当たり前に思える事態はしかし、実際にはどのような仕方でも確認できるのだろうか。この研究では、上記の問いを、ゲストとアナウンサーの相互行為分析でもって答えることを試みた。結果として、以下の2点の知見が得られた。①アナウンサーは、リスナーの代理として構造的に聞き役になっている（打ち合わせ時に前もって質問し、答えを知っていることを本番で再度質問している）。②ゲストは、構造的に話し手である（アマチュアのダンサーであっても、正当な知識の所有者としての話し手であることを表示すべき場所では、「プロの人」として指名され語っている）。

### （2）人間班（津村・寺尾・出口）「ラジオスタジオ内における相互行為分析—チーフアナウンサーの二重性を中心として—」

ラジオ番組は時間的編成を持っている。すなわち、時間に関わるプログラムが存在し、録音されたコーナーと生放送のコーナーが交互にある。定時に放送することが義務づけられたコマーシャルも存在する。このような状況の中で、チーフアナウンサーは、一方ではコーナーの登場人物でありながら、もう一方では、生放送を時間どおり進行させる現場監督の役割も担っている。ではそれはどのように担われているのだろうか。知見はここでも2つ。①非音声的振る舞い（手振り）を用いてまわりを急がせている。②サブアナウンサーは折に触れチーフを見て、チーフの進行速度への統制を、助けている。

### （3）インタビュー班（荒木・藤井・李）「ラジオ番組内のコーナー終了部分における相互行為分析」

インタビュー班は各メンバーへのインタビューをまとめる一方で、他班同様のビデオ

分析も行った。注目したのは、ラジオ番組中のコーナーの終了部分である。ここでは、なんとゲストへの別れの挨拶が2度行われていたのである。これはなぜだろうか。この点に関して、以下のような発見がなされた。①最終の挨拶の内一回はオン・エア中のコーナーの終了としての挨拶であり、もう一回はリスナーが聞いていないことを承知したうえでの挨拶であった。②ラジオスタジオは、時間的編成と空間的編成によって何重にも組織化されており、挨拶はその境界線で繰り返し行われていた。

(4) FMやまのは班(森川)「オープンスタジオにおける番組参加者の志向性」

FMやまのは班は、川沿いの公園で週末だけ電波をとばしているFMやまのはのオープンスタジオを観察した。機材が十分ないなかで、番組作成者たちがどのように共同で業務処理を行っているか研究した。結果として以下の2点が発見された。①マイクと体の位置との関係を変えることで、参加者は発話の意志を表示していた。②コーナーごとに違ったゲストの体の配置があった。